

阿南市指定文化財

絹本著色 弘法大師像

「瞬目大師御影像」

文化振興課 森脇 佳代子

「キラキラした素晴らしい香りで
クラクラした」

脳科学者の中野信子さんは、テレビでそう形容していた。

先日5月28日、東京都港区芝公園の増上寺で「令和の大猷香式」なる「令和蘭奢待猷香式」が執り行われた。蘭奢待といえは、天下第一の名香といわれる香木。歴史上初となる「蘭奢待」による猷香は話題を呼んだ。

大河ドラマ「麒麟がくる」で取り上げられたことも記憶に新しい。時の権力者たちに力の象徴とされたことは周知のとおり。正倉院に宝物として納められている当香木（長さ156センチ）には、足利義満、足利

義政、織田信長、明治天皇ら、そうそうたる顔ぶれが切り取った跡が残されている。

実は、阿南市には、この蘭奢待（もちろん切り取ったカケラの方だが）が存在した時代があったようだ。その経緯は、那賀川町平島に足利将軍家嫡流である阿波公方が居を構えたことに発する。おそらく先祖伝来の品であったであろう蘭奢待。それを阿波公方は代々受け継いでいたようだ。

さらに注目すべきは、その蘭奢待に匹敵する、もしかすると蘭奢待しのぐ価値があると阿波公方が認められた宝物が、阿南市に現存するという点である。

9代阿波公方足利義根は、寛政11年（1799）、香川県の善通寺から那賀川町の宝満寺に贈られた弘法大師像「瞬目大師御影像」を目にし、いたく感激した。そして、この蘭奢待含む香木三種を宝満寺に寄進したのである。先祖伝来の香木を差し出しても惜しくない、それだけ素晴らしいものだと感じたのだから

う。義根自筆の添え書きも残されている。

この「瞬目大師御影像」、平成11年（1999）に開催された「国宝 弘法大師空海」展では、関係者から高い評価を得たと聞く。

筆者も先日、「瞬目大師御影像」の実物を拝見する機会を得た。

絹本著色、絹に描かれた縦約88センチ、横約50センチの絵画である。善通寺にある原本を手本に描かれたものといわれている。たしかに構図等はそれを踏襲しているが、善通寺に現存するものとはタッチや趣が異なる。

宝満寺「瞬目大師御影像」は室町時代の作とされる。経年により、全体的な色彩のコントラストは甘

く、彩度は重鈍い。しかしかえってそれが大師像に重厚な存在感を与えている。丁寧に強弱を施した輪郭、

確実な筆さばきによる筆致がさらに妙を加え、アクセントとして用いられている金色は、信仰対象としての聖性、特別感を醸している。数珠の表現も大変繊細だ。一玉一玉、透き通る数珠玉の表現に、中を貫いている糸まで緻密に描かれている。

何よりも、鑑賞者を射抜くようなお大師さんの瞳である。相手を見透かすような鋭い視線は、善通寺の柔らかな「瞬目大師像」とは一線を画する。原則非公開だが、機会があれば一見の価値はあるだろう。

天下の名香、蘭奢待に値すると思われた宝満寺「瞬目大師御影像」。阿南市の指定文化財である。

あなん文化紀行は偶数月号に掲載します。



瞬目大師御影像(非公開)